

行基本変形 (basic row operation) 以下の3つの操作のこと

1.  $i$  行と  $j$  行を入れ替える ( $i \neq j$ )
2.  $i$  行に,  $K$  の非ゼロ元  $c$  をかける ( $c \neq 0$ )
3.  $i$  行に,  $j$  行の  $K$  の元  $c$  倍を加える ( $i \neq j, c \in K$ )

連立方程式の拡大係数行列に行基本変形を施しても, 同値な連立方程式が得られる.

置換 (permutation)  $n$  点集合  $\{1, 2, \dots, n\}$  からそれ自身への全単射  $\sigma : \{1, 2, \dots, n\} \xrightarrow{\sim} \{1, 2, \dots, n\}$  のこと.  $\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & \cdots & n \\ \sigma(1) & \sigma(2) & \cdots & \sigma(n) \end{pmatrix}$  のように2行表示される.

行列式 (determinant)  $n \times n$  行列  $A = (a_{ij})_{1 \leq i, j \leq n}$  について

$$\det A = \sum_{\sigma: n \text{ の置換}} \text{sign}(\sigma) a_{1, \sigma(1)} a_{2, \sigma(2)} \cdots a_{n, \sigma(n)}.$$

転倒数 (number of transpositions)  $\text{trans}(\sigma) = |\{1 \leq i < j \leq n \mid \sigma(i) > \sigma(j)\}|$ .

符号 (signature)  $\text{sign}(\sigma) = \prod_{1 \leq i < j \leq n} \frac{\sigma(i) - \sigma(j)}{i - j} = (-1)^{\text{trans}(\sigma)}$ .

サラスの方法 (Sarrus's rule)  $2 \times 2$  行列と  $3 \times 3$  行列の行列式を定義通り求めること.

$$\begin{vmatrix} a & b \\ c & d \end{vmatrix} = ad - bc, \quad \begin{vmatrix} a & b & c \\ d & e & f \\ g & h & i \end{vmatrix} = aei + bfg + cdh - ceg - bdi - afh$$

余因子 (cofactor)  $n \times n$  行列  $A$  の  $i$  行  $j$  列を削除し,  $(n-1) \times (n-1)$  行列  $B$  を得たとする.

$(-1)^{i+j} \det B$  を  $A$  の  $(i, j)$  余因子と呼び,  $\tilde{a}_{ij}$  と書く.

余因子行列 (cofactor matrix)  $n \times n$  行列  $A = (a_{ij})_{1 \leq i, j \leq n}$  について,

$$\tilde{A} = \begin{pmatrix} \tilde{a}_{11} & \tilde{a}_{21} & \cdots & \tilde{a}_{n1} \\ \tilde{a}_{12} & \tilde{a}_{22} & \cdots & \tilde{a}_{n2} \\ \vdots & \cdots & \ddots & \vdots \\ \tilde{a}_{1n} & \tilde{a}_{2n} & \cdots & \tilde{a}_{nn} \end{pmatrix}$$

で与えられる  $n \times n$  行列 (転置に注意).  $\det A \neq 0$  ならば  $A^{-1} = \frac{1}{\det A} \tilde{A}$ .

余因子展開 (cofactor expansion)  $n \times n$  行列  $A$  の  $\det A$  を再帰的に求める方法.

( $i$  行)  $\det A = a_{i1} \tilde{a}_{i1} + \cdots + a_{in} \tilde{a}_{in}$

( $j$  列)  $\det A = a_{1j} \tilde{a}_{1j} + \cdots + a_{nj} \tilde{a}_{nj}$

以下は,  $4 \times 4$  行列の1列に関する余因子展開である.

$$\begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} & a_{14} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} & a_{24} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} & a_{34} \\ a_{41} & a_{42} & a_{43} & a_{44} \end{vmatrix} = a_{11} \begin{vmatrix} a_{22} & a_{23} & a_{24} \\ a_{32} & a_{33} & a_{34} \\ a_{42} & a_{43} & a_{44} \end{vmatrix} - a_{21} \begin{vmatrix} a_{12} & a_{13} & a_{14} \\ a_{32} & a_{33} & a_{34} \\ a_{42} & a_{43} & a_{44} \end{vmatrix} \\ + a_{31} \begin{vmatrix} a_{12} & a_{13} & a_{14} \\ a_{22} & a_{23} & a_{24} \\ a_{42} & a_{43} & a_{44} \end{vmatrix} - a_{41} \begin{vmatrix} a_{12} & a_{13} & a_{14} \\ a_{22} & a_{23} & a_{24} \\ a_{32} & a_{33} & a_{34} \end{vmatrix}$$

(C1)  $\begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$  および  $\begin{pmatrix} a & b & c \\ d & e & f \\ g & h & i \end{pmatrix}$  の行列式と余因子行列は何か？

(C2)  $1 + \omega + \omega^2 = 0$  のとき, 余因子行列を用いて  $\begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 1 & \omega & \omega^2 \\ 1 & \omega^2 & \omega \end{pmatrix}$  の逆行列を求めよ.

(C3)  $n \times n$  行列  $A$  の行列式  $\det A$  と余因子行列  $\tilde{A}$  の定義を述べなさい.

(C4) 全単射  $f: \{1, 2, \dots, n\} \xrightarrow{\sim} \{1, 2, \dots, n\}$  を  $1, 2, \dots, n$  の置換と呼び,  $\begin{pmatrix} 1 & 2 & \cdots & n \\ f(1) & f(2) & \cdots & f(n) \end{pmatrix}$

と 2 行表示するのであった.  $\sigma = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 \\ 3 & 4 & 1 & 5 & 6 & 2 \end{pmatrix}, \tau = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 & 6 \\ 6 & 5 & 4 & 3 & 2 & 1 \end{pmatrix}$  とす

るとき, 符号数  $\text{sign}(\sigma), \text{sign}(\tau), \text{sign}(\sigma\tau), \text{sign}(\tau\sigma\tau)$  を求めよ.

(C5) 以下の  $4 \times 4$  行列の行列式を求めよ.

$$(a) \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 6 \\ 2 & 4 & 1 & 6 \\ 4 & 1 & 2 & 9 \\ 2 & 4 & 2 & 7 \end{pmatrix}, \quad (b) \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 1 \\ 1 & 1 & 1 & 0 \\ -1 & 0 & 0 & -2 \\ 0 & 1 & 0 & 1 \end{pmatrix}, \quad (c) \begin{pmatrix} 1 & a & b & c+d \\ 1 & b & c & d+a \\ 1 & c & d & a+b \\ 1 & d & a & b+c \end{pmatrix}, \quad (d) \begin{pmatrix} 0 & a & b & c \\ -a & 0 & d & e \\ -b & -d & 0 & f \\ -c & -e & -f & 0 \end{pmatrix}.$$

(C6) 連立方程式 
$$\begin{cases} a_{11}x_1 + \cdots + a_{1n}x_n = b_1 \\ a_{21}x_1 + \cdots + a_{2n}x_n = b_2 \\ \vdots \\ a_{n1}x_1 + \cdots + a_{nn}x_n = b_n \end{cases}$$
 を考える. 今

$$\mathbf{a}_1 = \begin{pmatrix} a_{11} \\ a_{21} \\ \vdots \\ a_{n1} \end{pmatrix}, \quad \mathbf{a}_2 = \begin{pmatrix} a_{12} \\ a_{22} \\ \vdots \\ a_{n2} \end{pmatrix}, \quad \cdots, \quad \mathbf{a}_n = \begin{pmatrix} a_{1n} \\ a_{2n} \\ \vdots \\ a_{nn} \end{pmatrix}, \quad \mathbf{b} = \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \\ \vdots \\ b_n \end{pmatrix}$$

と置く.  $\det((\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n)) \neq 0$  と仮定するとき, クラメル公式

$$x_1 = \frac{\det((\mathbf{b}, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n))}{\det((\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n))}$$

を示せ (ヒント 1: 元の連立方程式は  $\mathbf{b} = x_1\mathbf{a}_1 + \cdots + x_n\mathbf{a}_n$  と等価である. ヒント 2: 行列式の列に関する多重線形性と交代性を思い出す).

(C7) クラメル公式を用いて, 次の連立方程式を解け. 
$$\begin{pmatrix} 1 & -1 & 2 & 1 \\ 2 & 1 & -1 & 3 \\ 1 & 3 & 2 & -2 \\ -3 & 0 & 1 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \\ w \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 9 \\ 6 \\ 2 \\ -3 \end{pmatrix}.$$

(C8)  $n \times n$  行列  $A$  の成分がすべて整数であるとする. このとき  $\det A = \pm 1$  であることと,  $A^{-1}$  が存在してかつ  $A^{-1}$  の成分もすべて整数であることは同値であることを示せ.

# 1 行列の対角化

$n \times n$  行列  $A$  が対角化可能であるとは、ある可逆  $n \times n$  行列  $P$  が存在して、 $D := P^{-1}AP$  が対角化行列になることをいう。対角化は可能だったりそうでなかったりする。以下がその判定方法と、対角化可能な場合の  $P$  と  $D$  の計算手順である（注：証明は授業でそのうちやるとします）：

1.  $A$  の固有値  $\alpha_1, \dots, \alpha_s$  を列挙する。これは固有方程式  $\det(tE_n - A) = 0$  という方程式を解くことで達せられる。
2. 固有値  $\alpha_i$  の線型独立な固有ベクトル  $\mathbf{p}_{i,1}, \dots, \mathbf{p}_{i,d_i}$  を計算する ( $i = 1, 2, \dots, s$ )。これは  $(A - \alpha_i E_n)\mathbf{v} = \mathbf{0}$  という連立方程式を解くことで達せられる。
3.  $\sum_{i=1}^s d_i = n$  であるときに限って  $A$  は対角化可能である。  $P$  として

$$P = (\mathbf{p}_{1,1}, \dots, \mathbf{p}_{1,d_1}, \mathbf{p}_{2,1}, \dots, \mathbf{p}_{2,d_2}, \dots, \mathbf{p}_{s,1}, \dots, \mathbf{p}_{s,d_s})$$

が取れ（固有ベクトルを並べた行列）、このとき  $D = P^{-1}AP$  は、対角線に

$$\underbrace{\alpha_1, \dots, \alpha_1}_{d_1 \text{ 個}}, \underbrace{\alpha_2, \dots, \alpha_2}_{d_2 \text{ 個}}, \dots, \underbrace{\alpha_s, \dots, \alpha_s}_{d_s \text{ 個}}$$

が、この順に並んだ対角行列になる。

よく使う事実として、「 $A$  の固有方程式が 1 次式に分解し、重根をもたなければ、 $A$  は対角化可能」がある。

# 2 対角化の練習

(A1) 行列  $\begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$  は対角化不可能であることを示せ。

(A2) 以下の行列の固有値を求めよ。

(a).  $\begin{pmatrix} 1 & 2 \\ -1 & 4 \end{pmatrix}$ ,      (b).  $\begin{pmatrix} 6 & -3 & -7 \\ -1 & 2 & 1 \\ 5 & -3 & -6 \end{pmatrix}$ ,      (c).  $\begin{pmatrix} 2 & -1 & 1 \\ 0 & 1 & 1 \\ -1 & 1 & 1 \end{pmatrix}$ .

(A3) (A2) の行列の固有ベクトルを求めよ。

(A4) (A2) の行列のうち、対角化可能なものはどれか？

(A5) (A4) の行列  $A$  について  $P^{-1}AP$  が対角行列になるような可逆行列  $P$  を求めよ。

(A6) (A5) について、それぞれ  $P^{-1}AP$  を求めよ（注意：逆行列と行列積の計算は不要）。

(A7) 行列  $\begin{pmatrix} 2 & -1 & a \\ -1 & 2 & a \\ -1 & 1 & a+2 \end{pmatrix}$  が対角化可能かどうか調べよ。

**固有多項式 (eigen polynomial, characteristic polynomial)**  $n \times n$  行列  $A$  の固有多項式  $\chi_A(t)$  は  $\chi_A(t) = \det(tE_n - A)$  と定義される. 実は固有値は固有多項式の解と同じである.

**固有値・固有ベクトル (eigenvalue, eigenvector)**  $n \times n$  行列  $A$  について,  $\lambda \in K$  が  $A$  の固有値であるとは,  $Av = \lambda v$  かつ  $v \neq 0$  なる  $v \in K^n$  が存在することを言う. このとき  $v$  を固有値  $\lambda$  の固有ベクトルと呼ぶ.

**対角化 (diagonalization)**  $n \times n$  行列  $A$  について, 可逆行列  $P$  をうまく選んで,  $P^{-1}AP$  を対角行列にすること.

### 3 宿題

1 以下の行列  $A, B$  について, それぞれ対角化可能かどうか調べ, 対角化可能な場合は  $D := P^{-1}AP, D' := Q^{-1}BQ$  が対角行列になるような可逆行列  $P, Q$  と対角行列  $D, D'$  を求めよ.

$$(a). A = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 \\ -6 & 4 & 2 & 2 \\ 6 & -3 & -1 & -3 \\ 0 & 0 & 0 & 2 \end{pmatrix}, \quad (b). B = \begin{pmatrix} 1 & 5 & 1 & -5 \\ 4 & 1 & -4 & 5 \\ 6 & 3 & -4 & 4 \\ 5 & -1 & -5 & 8 \end{pmatrix}.$$

2 複素数  $a$  に対して, 3 次の複素正方行列  $A$  を次のように定める.  $A$  が対角化可能であるための必要十分条件を求めよ (東大数理の院試の一部).

$$A = \begin{pmatrix} 2 & 0 & 0 \\ 1 & 1 & a \\ 1 & -a & 3 \end{pmatrix}.$$

### 4 おまけ (解答なし)

- (X1) 対角化可能な  $n \times n$  行列  $A, B$  が,  $AB = BA$  ならば,  $P^{-1}AP$  と  $P^{-1}BP$  が対角行列になるような可逆な  $n \times n$  行列  $P$  が存在することを示せ (解けることは想定されていません).
- (X2)  $1, 2, \dots, n$  の置換の集合を  $S_n$  と書こう (当然  $|S_n| = n!$  である). 置換  $\sigma \in S_n$  の転倒数を  $\text{trans}(\sigma)$  とすると,  $\text{sign}(\sigma) = (-1)^{\text{trans}(\sigma)}$  なのであった. 多項式  $\sum_{\sigma \in S_n} q^{\text{trans}(\sigma)}$  を積表示せよ (ヒント:  $n = 2, 3, 4$  で答えのあたりをつける).
- (X3) 実行列  $n \times n$  行列  $A, B$  について,  $AB - BA = E_n$  となることはないことを示せ (ヒント:  $n = 1, 2$  のときは証明できるだろうか?).
- (X4)  $A, B$  を  $n \times n$  の正方行列とするとき (ここで  $n \geq 2$ ),  $\widetilde{AB} = \widetilde{B} \widetilde{A}$  と  $\widetilde{A} = \det(A)^{n-2} A$  を示せ (注:  $A, B$  が可逆行列のときはやさしい).